

Vol.001 息を飲む異空間：九州北部の装飾古墳が解き放つ古代の美と国際交流

日本に息づくもう一つの色彩豊かな古代文明

古代遺跡と聞いて多くの人々が想起するのは、エジプトのピラミッドや地中海世界の壮麗な神殿群かもしれません。しかし、日本の歴史の奥底にも、息を飲むような色彩と精緻な意匠で彩られた「装飾古墳」という類稀な遺跡群が存在します。これらは、古墳内部の石室や石棺に、彫刻や彩色によって多様な文様や画像を施したもので、現在までに全国で約 600 基が確認されています。特に、九州北部は、その色彩の豊かさとは多様なモチーフにおいて群を抜いており、古代日本の高度な文化と国際交流の様相を現代に伝えています。本稿では、九州北部の装飾古墳が持つ芸術的価値と歴史的意義に焦点を当て、その神秘的な魅力が観光産業にもたらす新たな可能性を探ります。

1. 装飾古墳の起源と発展：古代日本の美意識の結晶

装飾古墳の歴史は、概ね 4 世紀頃に遡ります。初期の段階では、石棺などに円形や三角形といった幾何学文様が浮き彫りされる形式が主流でした。しかし、時代が下るにつれて、その表現はより多様で色彩豊かなものへと進化を遂げます。彩色による装飾が導入され、赤、緑、黄、白、黒といった鮮やかな顔料が用いられるようになり、石室全体がまるで一枚の絵画空間のように変貌していきます。6 世紀にはその最盛期を迎え、九州北部の古墳群を中心に、その芸術性は頂点に達しました。なお、古墳に描かれた壁画としては、奈良県の高松塚古墳やキトラ古墳が著名ですが、これらは石室の壁面に直接描かれた「壁画古墳」として、主に彫刻と彩色の両方、あるいは彫刻を主体とした「装飾古墳」とは一般的に区別されています。装飾古墳の魅力は、その表現手法の多様性と、壁面に刻まれた文様や画像が放つ独特の立体感と躍動感にあります。描かれたモチーフは多岐にわたり、古代人の世界観を反映しています。武具（刀、盾、弓矢など）は当時の権力や軍事力を象徴し、馬は貴族の移動手段や威信を示すと

ネクストブレイク的に今はあまり知られていない、街や地域をご紹介しますコーナーです。観光客があまり訪れることのない魅力的な地を旅することは、旅本来の楽しみ、醍醐味を教えてください。

AUTHENTIC TRAVEL
プランナーズ EYE

ともに、来世への乗り物としての意味合いも持ち合わせていたと考えられます。また、鳥は天上世界との繋がりを、船は水路を用いた交易や来世への旅立ちを表すなど、それぞれのモチーフには深い意味が込められていたと推測されます。これらの具象的なモチーフが、幾何学文様と巧みに組み合わせられ、赤や緑といった鮮烈な色彩で表現されることで、あたかも現代アートのような、あるいは異世界に誘われるかのような「異空間」を創り出しています。これらの空間は、当時の人々にとって、死後の世界や神聖な領域を表現する場であり、現代の私たちにとっても、古代人の創造性と美意識に触れる貴重な機会を提供してくれます。

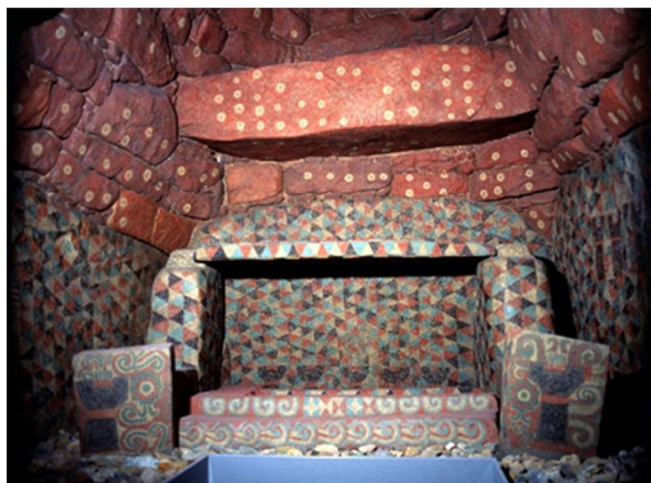


竹原古墳

2. 大陸文化との邂逅：国際交流の証としての装飾古墳

九州北部に装飾古墳が集中している背景には、地理的な要因と、それに伴う活発な国際交流がありました。古くから九州北部は朝鮮半島や中国大陸との玄関口として機能しており、人や物の往来が盛んであったことが、遺跡からも明確に読み取れます。装飾古墳に施

された文様や画像からは、少なからず大陸文化の影響が見て取れます。その代表例が、福岡県嘉穂郡に位置する王塚古墳です。この古墳は、その装飾のあまりの美しさから「装飾古墳の女王」と称され、奈良県の高松塚古墳と並び称されるほどの高い芸術性を誇ります。国の特別史跡に指定されており、その保存状態と色彩の鮮やかさは、訪れる人々を驚嘆させます。石室の壁面には、騎馬像、船、鳥、魚、幾何学文様などが、赤、緑、青、白、黄といった色彩で鮮やかに描かれており、まさに息を飲むような美しさです。また、王塚古墳からわずか 20 キロメートルほどの距離にある福岡県宮若市の竹原古墳も、大陸文化の影響を色濃く示す重要な遺跡です。この古墳の石室には、激しい波濤に揺れる船に馬を乗せようとしている人物や、天空を舞う龍の姿が描かれています。さらに、現世と来世の境界を示すかのような入り口部分には、中国の思想に由来する玄武（北の守護神）と朱雀（南の守護神）が描かれています。これらのモチーフは、中国の道教や陰陽五行思想が古代日本にもたらされ、当時の人々の死生観や世界観に大きな影響を与えていたことを明確に示しています。これは、早い時期から九州北部において、朝鮮半島を介して中国大陆の先進的な文化や思想が積極的に取り入れられていたことを雄弁に物語るものです。装飾古墳群は、古代日本の支配者層が、大陸からもたらされた新しい技術や思想を吸収し、自らの権威や世界観を表現するために、その芸術的才能を昇華させた証であると言えるでしょう。



王塚前室（レプリカ・桂川町）

3. 未だ見ぬ価値への注目：観光資源としての可能性

九州北部の装飾古墳群は、古代日本の芸術性、技術力、そして国際交流の歴史を肌で感じられる、他に類を見ない貴重な文化遺産です。しかし、これらの遺跡は、高松塚古墳やキトラ古墳に比べると、一般の認知度が低いのが現状です。これは、観光産業にとって大きな機会損失であり、同時に、未開拓の観光資源としての潜在能力を示唆しています。



チブ・サン ©熊本県立装飾古墳館

装飾古墳が持つ「息を飲む異空間」としての魅力は、現代の旅行者にとって、単なる歴史学習に留まらない、感動的な体験を提供できる可能性を秘めています。古代エジプトの壁画やマヤ文明の遺跡が世界中の人々を魅了するように、九州北部の装飾古墳もまた、その色彩豊かな美と、そこに秘められた壮大な物語で、国内外の観光客を惹きつける力を持っています。

おわりに：九州北部から世界へ、古代の美を解き放つ

九州北部の装飾古墳群は、古代日本の知られざる「色彩文化」と「国際性」を物語る、まさに「生きた博物館」です。これらの遺跡を新たな観光の目玉として育成することは、地域経済の活性化に貢献するだけでなく、日本の歴史と文化の多様性を世界に発信する上で極めて重要な意味を持ちます。この唯一無二の異空間をより多くの人々に体験してもらうためには、以下のような戦略的アプローチが有効であると考えられます。

- ① 装飾古墳は熊本県北部にも点在しており安藤忠雄氏設計による熊本県立装飾古墳館があります。保存上の理由から公開が制限されている古墳内部の再現や古墳から出土した副葬品などから深く装飾古墳を学び、テーマ性を持たせた周遊ルートの開発: 王塚古墳や竹原古墳だけでなく、周辺の装飾古墳群を巡るツアーを企画し、古代の歴史と文化に深く触れる「タイムトラベル体験」を提供する。
- ② 教育旅行やインバウンド観光へのプロモーション: 特に歴史や考古学に関心のある層、あるいは古代文明の謎に魅せられる外国人観光客に対し、集中的な情報発信を行う。

九州北部の装飾古墳群が、その秘められた美しさと物語を解き放ち、日本の、そして世界の考古学・歴史観光において新たなランドマークとなる日を心待ちにしています。この古代の色彩豊かな異空間へ、ぜひ一度足を踏み入れてみてはいかがでしょうか。



装飾古墳館